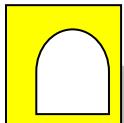


日吉台地下壕保存の会会報

第153号
日吉台地下壕保存の会

「私たち」の範囲

会長 阿久澤 武史

昨年8月20日(土)、慶應義塾大学の未来先導基金によるプログラムで、福澤研究センター主催の地下壕見学会が行われました。参加者は慶應の一貫教育校の中高生約30名、これに韓国の梨花女子大学校の学生7名が加わりました。午前中は横浜居留地商館跡や横浜開港資料館などを巡って福澤諭吉の足跡をたどり、午後に日吉台地下壕を見学するツアーでした。

地下作戦室で、私はいつものようにアジア・太平洋戦争における日本人の戦没者数について語りました。民間人を含む約310万人の犠牲者は、その大半が1944(昭和19)年7月のサイパン陥落以降に命をおとしています。それは連合艦隊司令部が日吉に来てから敗戦までの約1年と重なります。そのことを話しながら、私はふいに「日本人」という語の示す範囲がわからなくなってしまいました。目の前に韓国の大学生がいて、では私が言う「日本人310万人」は朝鮮の人たちを含むのか。使い慣れた語の定義に戸惑う自分がいました。「日本人」とはいったい誰のことを指すのでしょうか。

私たちは、日吉の戦争遺跡を歩く際に、この国が過去に経験した戦争を追体験します。何のために地下壕を作り、海軍はここで何をしていたのか。そのまなざしは「日本人」としての「私たち」を起点にし、至極当たり前に「私たち日本人」の問題としてそれを語ります。そこには「あなたたち」という視点が欠けています。日本の軍国主義がアジア諸国に残した爪痕を含め、あの戦争の全体像を複数の観点からとらえ直す必要があるように思います。あの時、もし韓国の学生に「日本人」の範囲を問われたら、私は明確な言葉で答えることができませんでした。

日吉には朝鮮人労働者の飯場があったと言われます。私たちは見学会でそのことにほとんど触れません。語らないということも選択できますが、それは「私たち」の範囲を狭めることにつながります。哲学者の鷺田清一氏は、「私」が「私たち」という語を使うことについて次のように述べています。

つまり、みずから個人的な主張を(他の人たちにもさまざまな異論がありうることを承知のうえで)「わたしたち」

というふうに第一人称複数形で語りだすことには、わたしが

「わたしたち」を僭称する、という面がたしかにあります。あるいは、おもねりやもたれつき、つまりは同意への根拠なき期待といったものがあるにちがいありません。(「『摩擦』の意味——知性的であるということについて」内田樹編『日本の反知性主義』晶文社より)

【目次】

巻頭言【1-2p】「私たち」の範囲

会長 阿久澤武史

会報150号を記念して(2)【3-8p】

(執筆者: 敬称略) 永瀬 達、関崎益男、岡上そう、山田 譲、山田淑子
岸本 正、佐藤宗達、小山信雄、岡本雅之、佐藤由香、田中 剛

追悼文【8p】 谷藤基夫先生への感謝と追悼 運営委員 岡上そう

連載【8-12p】

☆海外戦跡めぐり(22) ホテル便り(下)台北賓館・台湾 運営委員 佐藤宗達

☆日吉海軍・設備アレコレ(35) 地下壕内の設備の痕跡 運営委員 山田 譲

報告【12-14p】 新型コロナ下での見学会

運営委員 山田 譲

お知らせ【15p】 2023年度(第16期)日吉の戦争遺跡ガイド養成講座

活動の記録【16p】 2022.12月~2023.3月

「私」が「私たち」を勝手に名乗る（僭称する）のは暴力的であり、卑屈（おもねり）であり、甘え（もたれあい）でもあります。普段何気なく口にする「私たち」という語について、もっと敏感にならなければなりませんし、それを国家や戦争を語る文脈で使う場合は、なおのこと慎重であるべきでしょう。

現在、この国の政府は単純な多数決の論理によって、「敵基地攻撃能力」を保有する方向に舵を切ろうとしています。十分な議論もなく、「私」の意見が「私たち」を勝手に名乗るようなことがあれば、この国がかつて経験した軍国主義の時代に逆戻りするのと同じことです。冒頭で述べた昨年8月のツアーは、福澤諭吉の足跡を辿るものでした。福澤が願ってやまなかつた日本の近代化が行き着いた果ての姿が、日吉の地下壕だと思います。その意味で、横浜の開港資料館から日吉に移動したコースは、日本の近代史を考えるうえできわめて象徴的な意味があります。1945（昭和20）年8月15日の敗戦から始まった戦後の平和主義が行き着く果ての姿を見ないようにするためにも、「私たち」という語の使い方に注意しなければなりません。

さて、私事ですがこのたび本を出版しました。『キャンパスの戦争——慶應日吉1934-1949』（慶應義塾大学出版会）というタイトルです。日吉第一校舎を中心に据えて、旧制予科の教育、戦争と学生、上原良司、キャンパスに残る地上と地下の戦争遺跡についてまとめ

ました。理想的な学園が開かれ、そこに海軍が移り、地下に巨大な地下壕が作られ、米軍が入り、学びの場を取り戻すまでの15年間の記録です。「私たち」の学園は実にあっけなく「私たちのもの」でなくなりました。鷺田氏が言うように、「私たち」という語には暴力性や甘えが含まれますが、同時にそれが意味する範囲を一生懸命に守らなければならないものもあると思います。

キャンパスの戦争

慶應日吉 1934-1949

阿久澤 武史
Takashi Akozawa



このキャンパスは 戦場とつながっていた—。

目映い光に溢れる「理想的学園」はやがて、アジア・太平洋戦争へと巻き込まれていく。青春を謳歌していた慶應義塾大学の予科生たちがが学ぶモダンな校舎は、いかにして兵士たちが行き交う空間となったのか。連合艦隊司令部地下壕で知られる日吉キャンパスの誕生より米軍からの返還までを描く「戦争とキャンパス」の昭和史。

慶應義塾大学出版会
定価(本体 2,700円+税)

会報150号を記念して(2)

「日吉台地下壕」に思う

会員 永瀬 達

戦争を全く知らない戦後の世代となりましたが、あの戦争の悲惨さを将来に伝える「日吉台地下壕保存の会」が1989年発足以来33年目を迎えました。私が最初に地下壕に入ったのは長靴を履いて暗い泥水の中を歩いての見学でした。それ以来、亀岡副会長並びに喜田副会長さんには大変お世話になっています。終戦当時、旧制中学2年生でしたが学徒動員で疎開先の山口県下関市の山岳で陣地構築のためのトロッコによる土砂搬出作業をしていた思い出が未だに鮮明に残っています。そして自決も考えた13才の軍国少年でした。

横浜市神奈川区に居住して50年になりますが運営委員の皆様方への協力が出来なかつたことが心残りです。神奈川区内の小学校並びに横浜市教育委員会、神奈川県教育委員会などで日吉台地下壕の存在を全く知らない方々へ微力ながらPRをしてきました。港北区より移動してこられた副校長が一人だけ生徒と地下壕見学をしておられましたがその他の小学校副校長は残念ながら聞いたことはある、又は知らない状況でした。横浜市民でもこの貴重な戦争遺跡を知らない人が大多数なのは大変残念です。連合艦隊司令部がここで戦艦大和の沖縄突入作戦の無電を発した記念すべき場所なのです。ガイド養成講座卒業生も増え今後は会員と共に日吉台地下壕が文化財指定になるべく努力を重ねたいと思います。

祝「会報」150号超!! 「日吉台地下壕保存の会」との関わりと所感

会員 関崎益男

私の子どもが小さかった頃(四半世紀前)、気軽に参加できる会が同会だった。亀岡敦子さん・喜田美登里さん・白鶴邦子さん・新井揆博さん・渡辺賢二さん等が親しく声をかけてくれた。(川崎・横浜)平和展は、川崎市平和館と日吉キャンパスを交互に会場として開催された。“できることを、できるところまで”のスタンスで、協力・参加できた。慶大日吉キャンパスは、子供たちにとって開放感に溢れた場所だった。また、寺田貞治さん・須田輪太郎さん・大西章さん・岡上そうさん・十菱駿武さん・菊地実さん・幅国洋さん・白井厚さん等の出会いも忘れられない。若者たちの発表で報告した方々は、多くが研究者になっている。次世代への継承ができつつありうれしい。

私の「会報」への掲載稿としては、①第51号：第七回 川崎・横浜 平和のための戦争展‘99 写真／②第64号：第2分科会 2002 「人間何ごとかをなせば悔恨あり」／③第65号：(9頁)会員寄稿「伊勢神宮と天皇制」／④第73号：(5頁)会員寄稿「高麗神社・聖天院と巾着田」／第12回 横浜・川崎 平和のための戦争展／⑤第84号：(6頁) ○戦跡シンポに参加して(国立市 2007 東京大会) 川崎、山梨、館山(千葉)、みなかみ(群馬)大会の参加を記載、報告した。「会報」に掲載され、活字になると嬉しかった。その時々の近況・心境を伝えることができ、会員としての自覚も生まれた。現在の職場での面談等で、慶大出身者がおられると、ほとんど「日吉台地下壕」の話題を取り上げた。

台湾の調査旅行中、交通事故で急逝された慶大職員(図書館)：田中知之さん(享年：59歳)のことも忘れられない。著書には、①『海軍第一期兵科予備学生名簿』(1995)、②『八重の潮路の果てに：第一期海軍兵科予備学生の記録』原書房、(2008)、③「三人閑談 早慶応援物語」(三木佑二郎・三田完・田中知之/『三田評論』所収)の著書・論考等がある。

※都倉武之(トクダ タケヨ)さんとも交流があったと聞く。前に向かって更なる戦争遺跡の保存と活用、若者たちのテーマ、ライフワークとなることを期待する。

会報150号超に寄せる思い

運営委員 岡上そう

私が中学時代、自宅裏山に日吉台地下壕があり、友人と探検ごっこをしているうちに興味深くなり、日吉台中学校で地歴探訪部を創設し顧問に茂呂先生と谷藤先生を迎えて、地域の歴史を探訪するフィールドワーク中心の部活動を展開しておりました。ある時、茂呂先生から日吉台地下壕を保存しようとする会が立ち上げられるので、興味あるなら入ってみないか?と誘われたのかキッカケとなり、中学生から46歳になった現在まで僅かながら、のカタチで保存の会に携わって参りました。

大雪の中、大倉山記念館で開催された戦争展、学生たちによるパネルディスカッションで新たな友が出来た川崎平和館での戦争展やイベントで訪れた戦跡の数々。それらは過去の歴史の残された部分を自らの目で見て、触れ、その場で感じる、考えると言ったフィールドワークの原点を大切にした「生」の学習体験であり、そこでの出会いによる新たな発見や気付き、展開が生まれてくる。そんな素晴らしい活動の一端を会報という紙面に掲載しているわけですが、本当はその活動記録の実際の感動や様々な人達との繋がりは、紙面では表現しきれないものがあります。

会報150号超が示すものは、そこから遙か深く先の未来へ、なんとしても繋げていかなければ!という往路折り返し地点での景色なのだと思います。

戦争の煽り文句は、いつも「被害者」意識

運営委員 山田譲

今年の9月1日に、慶應大学出身の元特攻兵だった岩井忠正さんが102才で亡くなられました。日吉でも私たちにお話しください、特に強調されていたのは「沈黙してはいけない」ということでした。忘れられません。

今、ウクライナをロシア軍・プーチン政権が侵略しています。これに勇敢に立ち向かうウクライナの人たちは必死です。胸が痛みます。他方、ロシアの少なからぬ人たちも反戦デモを果敢に闘っています。岩井さんの言葉を体現しているかのようです。しかし多くのロシア国民は、「ウクライナはロシアの一部」「ゼレンスキーポーチはナチスだ」と主張するプーチン

を支持しています。まるでロシアが領土を奪われた被害者であるかのようです。

日本の軍国主義者も、かつて「満洲は日本の生命線」「暴れる支那を懲らしめろ」と言って中国を侵略し、その中国を支援している米英諸国を「鬼畜」呼ばわりして戦争を始めました。「被害者」意識を煽るプーチンの言い草とそっくりです。しかし、当時の日本では官憲の弾圧と「非国民」呼ばわりされるのを恐れて国民は「沈黙」し、日本全土を焦土にされてしまいました。東アジア全域では2000万人が戦争で命を奪われました。

こうした戦争の過去を、私は決して忘れてはならないと思っています。すでに72ですが次の世代に、日吉で何があったか、日本で、アジアで何があったか、私たちの今と未来のために語り継がねばと思います。



大倉山梅林 令和5年3月

会報150号記念に関して

運営委員 山田淑子

会報は保存の会の歴史そのもの。私も保存の会でガイドを始めて10年ぐらいになる(喘息持つたためコロナにかかると重症化の可能性があるので現在お休み中)。地下壕のガイドをするに当たり「戦争と平和」について学習し、追体験など体得をしてきた。そしてガイド活動は私にとって新しい窓を開けていくことになった。

アジア太平洋戦争を伝えていくことは、その実相から目を放すことはできない。戦争は遠くなつたが、我々一人ひとりの中の戦争とは。苦しい思いを抱えたまま現在を生きている人々を抜きには戦争、戦争遺跡は語れないのではないか。戦争孤児が朝鮮戦争に加担しなければならなかつたこと。空襲・原爆でいまだに苦しめられている人。沖縄戦で県民の4人に1人が戦禍に倒れ、そして現在は日米安保条約や日米地位協定により苦しめられている現状。これらのことを考えることなしには、戦争も地下壕も語れないと思うこと。

70年以上前の戦争を歴史として伝えるのではなく、現実と肉迫した戦争、その遺跡を語り、生きた言葉で継承していきたい。

地下壕と関わって

運営委員 岸本 正

ガイド養成講座を受講し本格的にガイド活動を始めたのはリタイヤ後ですが、初めて地下壕との関わったのは現職時に遡ります。当時は寺田先生の頃だったと思いますが、現在の入壕口でなく足立家の方から入っていました。夏休みの社会科研修の一環で団体窓口として何度かお世話になりました。その後、会員になり、戦争遺跡を巡るバスツアーにも何度か参加し関心を深めました。地下壕へ関心をもった何よりの動機は、一年間通ったキャンパスにこのような戦争遺跡があったとは当時つゆ知らなかつたことです。それに比べて現在は、高校・大学を通して教育活動に取り入れられる機会があることには、隔世の感をもつと同時にたいへん良いことと思います。昨年は、地元にありながらあまり知られていない上瀬谷に残る戦争遺跡を調べ紹介することができました。この件は、これからも一般に啓発を続けたいと思います。

会報150号によせて

運営委員 佐藤宗達

2011年新聞の神奈川版に日吉台地下壕の紹介記事があり見学会がある事を知り、10月定例見学会に参加しました。喜田さんの「ガイド募集中に促されて入会、ガイド養成講座を受講することにしました。その折に会報101号102号を貰いました。11月の横浜3つの外国人墓地をめぐるツアー(英連邦墓地他)に参加、手塚さんのガイドに感心しました。そして感想文を書くように云われ会報104号に載せていただき、仲間入りさせていただきました。会報150号を振り返り、会の活動で思い出す事がたくさんありました。

(1) 2017年3月ガイド養成講座で戦争体験を聞くというテーマで川崎中原の空襲・戦災を記録する会 中野幹夫さんのお話を聞きましたが1942年4月のドゥリトル本土空襲の事もお話をされました。かつて会社の上司・平岡さんがドゥリトル空襲を体験された事を思い出しました。当時早稲田中学4年生、土曜日でしたが補習で登校、爆撃に会いました。爆弾(焼夷弾かもしれません)が落ち死者がでました。塀が燃えて消火にあたりましたが配属将校、気が動転したのでしょうか塀に向かって軍刀を抜いて振り回しているのを目撃したそうです。

(2) 今年6月 都倉先生が横浜市大倉山記念館で藤原工業大学の講演をされました。その中で予科は少数精鋭主義で語学に力を入れたとの事です。会社の上司・古河原さんは慶應出身で温和な博識の方で、OB会でお目にかかった折、「慶應予科ですか」とお聞きしたら「藤原工業大学予科」と云われ迂闊にも藤原工業大学に予科があった事を知りませんでした。都倉先生のお話を聞いて古河原さん的人格は藤原工業大学予科で培われたものと思い当りました。これからも新しい発見があるものと期待しております。

会報150号、おめでとうございます！！！

運営委員 小山信雄

保存の会が発足し、会報第一号が発行された1989年はとても画期的な年でした。昭和から平成へ(1月)、天安門事件(6月)、ベルリンの壁崩壊(11月)、東西冷戦終結宣言(12月)とその後の世界を大きく変える萌芽の年であったと思います。当時の私は初めての海外赴任地シンガポールで家電メーカーに電線を売り歩く日々であり、日本の高度経済成長に陰りが見始めた当時、東南アジアの経済はまだ右肩上がりの成長中で、私も所謂「モーレツサラリーマン」の一人でした。一方、TVでは「アジア侵略を行った残忍非道な旧帝国日本軍」の映画が頻繁に流され、心苦しい思いをしていました記憶があります。

時は経て、2012年11月24日に初めて日吉台地下壕の見学会に参加しました。切っ掛けは、当時人事部で担当していた人権関係の広報誌に掲載する記事に「キャンパスに残る戦争遺跡：日吉台地下壕、登戸研究所」が選ばれ、私が執筆担当になったことでした。日吉キャンパスに二年間通いながら、その存在にほとんど気付かなかった自分を恥じると同時に、地下壕には大いに興味を惹かれ本日に至っています。そして、120号(2015年4月30日発行)より大西前会長から会報編集の仕事を引き継ぐこととなりました。当会にて学ぶことは枚挙に暇ありませんが、「海外と比べ我が国では戦争研究が圧倒的に足りない」という白井先生のお言葉には全く同感であり、特別に心に響いています。過去の正しい理解なくして、どうして現在・将来の見通しが可能となるか！？

戦争というとてつもない大きなことがらだからこそ、左右織り交ぜ様々な意見・異論・見解がありますが、目の目を見ない多くの歴史の真実も埋もれていると感じます。地道なことであっても実態を研究し広めてゆく保存の会の活動は大変貴重です。これからも会の活動を通じて「あの戦争は一体何だったのか？」を追求して行く一人でありたいと思います。

会報150号に想う

運営委員 岡本雅之

我々「日吉台地下壕保存の会」の会報は2022年6月17日発行で150号を数えた。1989(平成元)年4月8日設立された保存の会の会報1号は、同年5月10日付で発行されそれから33年経ち150号となった。会の発展とともに会報も継続されてきたのであろう。

私には先輩諸氏のこの継続の力にただ敬意を表すことしかできないが、これからも及ばずながら共に努力していこうと思っている。

私が地下壕に初めて入ったのは2013年8月5日の一般定例見学会で、ガイドの山田さん、石橋さんの説明が記憶に残っている。その直後に会員になり総会や講演会に参加した。そして2016年第10期のガイド養成講座を受け、無事に終了してガイド活動を始めることができた。会員になってから養成講座の受講まで3年のブランクがある。私は近現代史、特に軍事史には昔から興味があり、日吉の地下壕の存在は以前から知っていたが、そこまで積極的にはなれなかった。仕事を完全にリタイアしたこともありガイド講座を受講したが、今ではこの活動が定年後の生活の大きい部分を占めている。

これまでの会の活動を知るには「会報」を参照するのが一番である。私も過去に会報1号から直近号までのすべてに眼を通し、簡単なメモを取ったことがある。ホームページにすべての会報が載せられていて、いつでも見ることができ大変便利である。これからも資料としても会報発行を続けていき、300号・500号へと繋げられればと期待している。



大倉山梅林 令和5年3月

日吉台地下壕との出会い～会報150号に寄せて～

運営委員 佐藤由香

8年前の夏、日吉台地下壕のニュース映像を見て、翌春のガイド養成講座に申込をしました。以前から興味があった地下壕見学のみで済ませなかつたのは「花は咲く」の歌が理由です。“わたしは何を残しただろう”というフレーズがあつて、ずっと胸に刺さっていました。不惑を前に成し遂げたことがあるわけでもなく、子どものいない自分にはつなぐ命もありません。2010年に仕事をパートに変えたことで、打ち込める何かを探していた時期でもありました。学びなおして戦争の悲惨さと平和の大切さを伝えるお手伝いができれば、との思いで門をたたきました。実際養成講座が始まると、同期含めみなさんが立派に見えて、気後れする場面もありました。しかし修了式で先輩からの言葉→「自分は壁の厚さを紹介する30秒のガイドから始めた。そういう関わり方もあります。」を聞いてスッと気持ちが軽くなつたことを覚えています。基本、保存の会は自分ができることをできる範囲で、という姿勢です。そして自分にできることは必ずある！ちなみに私はトイレに残っている見学者がいないかチェックしてお知らせすることから始めました。また今皆さんのが覧になっている会報の発送作業も大切なお仕事のひとつです。

最後に第124号(2016年2月10日発行)P4「第10期ガイド養成講座始まる」の記事より引用です。私含め11人の受講生に向けて、「新しい風を呼び込んでくれることを期待」と記されています。7年経った現在、新風を吹き込めたかどうかは？ですが、当時机を並べた0さん、Tさん心強い同期と共に、先輩の背中を追いかけ活動を繋げていきたいと思います。

「日吉台地下壕のガイドしてます」には、きっと不思議な縁があったのかも・・・

運営委員 田中剛

会報発行150号到達おめでとうございます。過去から脈々と継続してきた先輩方や保存の会の活動の上に、現在のガイドの姿があることを実感する次第です。日吉台地下壕でガイドを始めて、最初に手にした会報は121号で、よき仲間にも恵まれて早7年近くが経過しました。日吉で活動することになったのには何か縁があったのだろうと、駅の改札を出るたびに感慨深さを覚える私があります。それにならぬ思い出から紹介しましょう。

小学校を卒業するまでの昭和40年代前半は、私は世田谷区の九品仏に住んでいました。当時は高度経済成長期といいながらも、まだ戦争の痕跡がさりげなく残っていた時代で、友だちの家へ遊びに行けば、庭の真ん中にトタンの雨戸で塞いである防空壕が残っていて、もぐっては怪談話に興じたものです。また散策で有名な等々力渓谷の斜面には、全長50mほどのコの字型に掘られた素掘りの防空壕が残っていて、懐中電灯を持って友だちと自転車を遠乗りして出掛けたものです。先に入った上級生から「曲り角にローソクを立てておいたぞ」と、背中を押されて恐る恐る中へ進むのですが、出口の明かりが見えてきた時の安堵感と達成感は忘れることができません。当時は「防空壕探検」というのも男の子の立派な遊びメニューのひとつだったと思います。

そんな同級生の中に、「日吉本町」から越境で電車通学してくるD君がいました。彼から「日吉にはでっかい防空壕があるんだぜ」と機会あるごとに教わっていたので、彼はおそらくいずれかの壕を認識していたのでしょうし、それは私にとって日吉についての最初の印象を持つきっかけだったと思います。中学入学の時から軍都の面影が残る相模原に転居したので、日吉のことは忘却の一途をたどるばかりでしたが・・・。

さて、それからうん十年・・・県博で歴史ガイドをしていた2015年に、まさに日吉をテーマにした特別展「陸に上がった海軍」が開催されました。小学生時代の記憶が呼び覚させたのはもとより、ガイド活動が行われていることを知って、戦跡ガイドを目指していた私は「おっ、これだ!!」と直感し、その勢いのまま保存の会に飛び込んだのです。その時にD

君の存在をうん十年ぶりに思い出したのは、言うまでもありません。

さすがにD君の言っていたのは防空壕ではなく、まさに海軍の中枢部であったことを県博の展示で十分認識しましたが、今では、日吉でのガイド活動に因縁めいたものを感じながら、「自分が語らなければ」との誇りと気概で活動参加しています。

追悼文

谷藤基夫先生への感謝と追悼

運営委員 岡上そう

我が恩師である谷藤基夫先生が昨年秋に他界されたという知らせを受け、いま自分たちを育ててくれた谷藤先生への思いを綴ります。現在47歳の私が中学一年の後半、まだ日吉台地下壕保存の会が無かった頃、当時バスケットボール部の私が半ば掛け持ちで始めた、フィールドワーク主体の地域の歴史を訪ねる部活動、「地歴探訪部」の顧問（谷藤先生、茂呂先生）として私たち部員の指導をしてくださいました。地歴探訪部の特徴は学校外での活動、つまり史跡、遺跡などの現地へ直接行き、事前に座学で得た知識を現地でトレースし、そこから感じ取る歴史の重み、感動、ロマンを肌で学べるというものでした。

谷藤先生は部活動の時間が長くなると、ラーメン屋さんでご馳走してくれたりするのですが、谷藤先生は大抵ビールにラーメンと餃子という定番で、麺の伸びきったラーメンを締めに美味しいように食べていたのを今も鮮明に覚えています。

日吉台地下壕保存の会が発足してからも再び会員として、運営委員として会報発送作業や見学会、交流会、そして戦争展など、様々な場面で常に私を支えてくれた恩師でありました。そしていつも笑顔で、一緒に行動しているととても落ち着く、というか安心感を与えてくれる人柄でした。随分と長い付き合いなので、もはや個人的には恩師というより「お父さん」という感覚でした。空席になった椅子の上が、きっといつまでも温かなものでありますように。

学問に、歴史に、戦争に、そこに人肌の温もりを想像するには人間味溢れる指導者が必要なのだと、我が恩師谷藤基夫先生は実践をもって証明してきたのだと思います。谷藤先生の築き上げた歴史に敬意を表し、追悼の言葉とさせていただきます。

谷藤先生、今までずっとありがとうございました！

連載

海外戦跡めぐり(22) ホテル便り(下) 台北賓館・台湾

運営委員 佐藤宗達



台北賓館正面玄関

1895年日本は下関条約により清国から台湾及び澎湖列島を割譲された。日本は鉄道・道路・港湾などのインフラ整備はしたがホテル・レストランなどは民間任せであった。そのため要人の宿泊は台湾総督官邸を使用した。建物は1899年起工、1901年に完成した。その後1911年から改築工事を経て1913年に完成した。建物はバロック風の二階建てで庭は西洋風の前庭と日本式庭園とがあり前庭には亜熱帯性植物が選ばれ、植樹されていた。これはマラリアをはじめ

とする疫病が蔓延していた時代、要人が地方都市に行かなくても台湾らしい南国風情を楽しめるようにとの配慮であった。台湾総督の暮らす住居と執務の場であり要人を泊める迎賓館でもあるが、公邸としては使い勝手が悪く、住居用に別館を建て執務は1919年に完成した台湾総督府に移った。そのため総督官邸は迎賓館となった。

1923年皇太子時代の昭和天皇（摂政宮）が台湾を行啓した際はここに宿泊しております。また多くの皇族も訪台しここに宿泊しておりますが日本軍人の宿泊には使われなかつた。

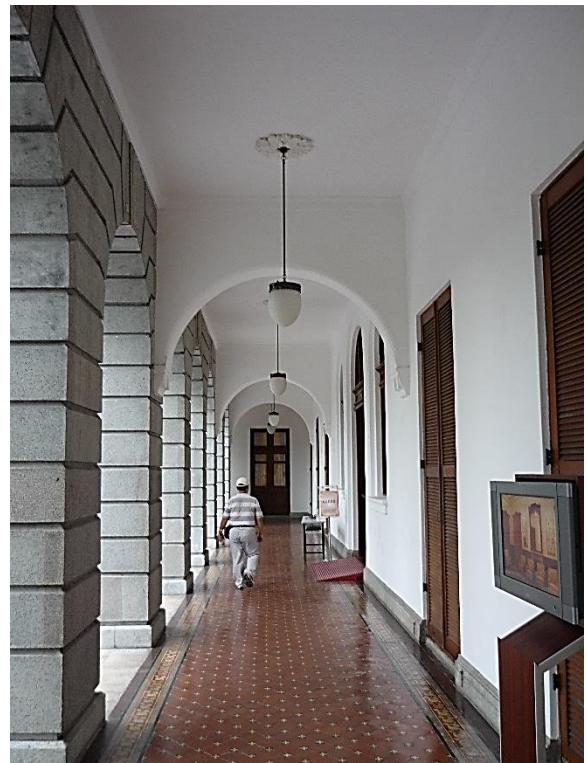
1946年2月からは台湾の迎賓館として台北賓館となり国内外を問わず賓客を受け入れる事となり、日本統治時代から2001年に閉鎖するまで多くの要人が利用した建物である。

一方 蔣介石・宋美齡は要人も泊まれるホテルを建設、円山大飯店が1952年に開業し、要人宿泊は台北賓館と円山大飯店とで対応してきた。なお敷地は元台湾神社の跡地である。

なお3回の連載で紹介しきれなかつたホテルの名前をあげておきます。

シンガポール：ラッフルズホテルは日本軍が接收、昭南旅館と改称、日本軍将校の宿泊所となり、また軍属・報道班員なども利用しており、井伏鱒二の作品中にも描かれている。

香港：ザ・ペニンシュラは日本軍が接收、東亜ホテルと改称、日本軍の司令部が置かれた。



台北賓館 廊下

連載

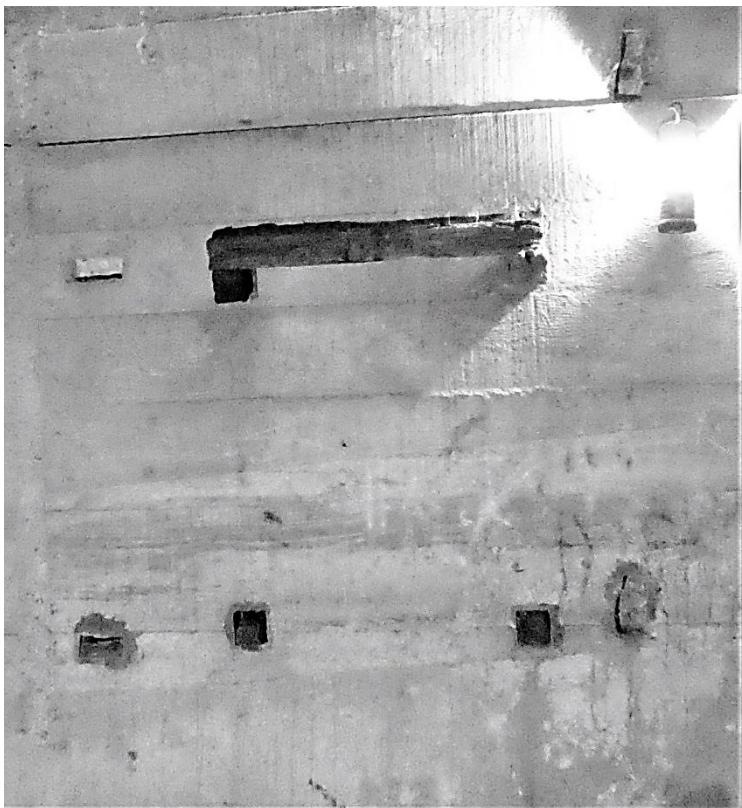
日吉海軍・設備アレコレ【35】地下壕内の設備の痕跡 ——配電盤、手洗い台、換気扇

運営委員 山田 譲

昨年6月2日に、連合艦隊地下壕の整備保全調査がありました。これは日吉キャンパス事務センター施設環境担当（課）として、地下壕内の整備保全を実施するための調査でした。私も参加して、保存の会としての要望もお伝えしました。その時、慶應義塾大学民族学考古学研究室の安藤広道教授から、地下壕内の諸設備の痕跡をいろいろ教えていただきました。これについては2020年2月に、安藤広道研究室より『慶應義塾大学日吉キャンパス一帯の戦争遺跡の研究Ⅱ』という報告書が出されています。これに詳しい考察が書かれていますが、安藤先生から現場で直接ご教示いただき、私も認識を新たにしました。

①配電盤の跡

地下壕内には天井に電気配線の跡があり、電灯や蛍光灯、通信機など電気設備がありました。また電源装置として発電機や蓄電池置場もありました。そうであれば当然なのですが、電気配線の主幹線と支線を接続するための配電盤が必要です。私は工場の設備係でしたので、仕事としてそういう設備を扱っていました。しかし安藤先生に言われるまで、地下壕内にその痕跡が残っていることに気がつきませんでした。



航空本部壕への分岐点の配電盤跡

配電盤の跡がはっきり残っているのは3ヵ所あります。場所はいずれも地下通路がT字型になっている所で、木レンガが少し縦長の長方形に埋め込まれています。横向きに角材が取り付けられている所もあります。この木レンガに配電盤を取り付けたと思われます。配電盤は皆さんの家庭にある分電盤と似た装置です。木レンガの配置からすると大きさは縦50cm位の鉄板製の箱型で、手前に扉が開きます。中には開閉器(大型のスイッチ)、ヒューズ、接続端末(ターミナルコネクター)が入っていて電線が接続されています。

終戦後、海軍が出ていった後に寄宿舎の留守番をしていた慶應大学生だった芹澤宏(たかし)さんは、長い階段を降りて地下壕を2回くらい見たそうです。その時、工学部の先輩が「配電盤があるはずだ」と言って探して、スイッチを入れたら部屋がぱッと明るくなったと言っていました。おそらく126段の階段を降りた所あたりに配電盤があったのではないかと思います。今、そこはふさがれています。

(2013年3月9日に山田が聞き取り)

②手洗い台の跡

地下作戦室の両方の出入口の外側の脇に、手洗い台の跡があります。コンクリートの壁にL字を上下逆にした形の細い溝が、床面から70cm位の高さまで立ち上がっています。この溝をよく見ると、内側に丸くなっています。丸いパイプがここに埋め込まれていたことがはっきりわかります。外径2cm位の鋼管のあとです。これは標準的な水道管のサイズ(外径19.1mmまたは22.2mm)です。この細い溝の所に水道管を配管してセメントで固定し、その先に蛇口を取り付けてあったと思われます。

この逆L字型の内側の上寄りに、長さ30cm位の角材が横向きに埋め込まれています。ここに陶器製の手洗い台を取り付け、排水は真下の排水溝に流したのではないかと思われます。また逆L字型の溝に続く床面にも内側が丸い溝があり、これは少し太めの鋼管の跡と思われます。これとは別に床面から細い鉄パイプが少しだけ頭を出して立ち上がっています。これらも明らかに水道管の配管(跡)です。



洗面台跡 作戦室の外、長官室側

この手洗い台についての記録・回想記・聞き取りは何もありません。ただ東洋陶器製の洗面台の遺物が、2009年のマムシ谷の航空本部等地下壕出入口の発掘調査で出土しています。これと同様のものが、連合艦隊司令部地下作戦室にもあったのでしょうか。

私は地下壕内の排水溝など、排水対策のための設備や設計については意識して案内ガイドで話していました。しかし上水=水道設備も整えられていたことは知りませんでした。確かにバッテリー室や食料倉庫前に太めの鉄パイプが埋設されているのは知っていましたが、現在ではここに地下水の排水が流れ込んでいます。それで排水管だろうと思っていました。しかし排水溝と並行して排水管があるのは変です。安藤先生は「これは外からの水道管でしょう」と言つていて、なるほどと思いました。

連合艦隊司令部機関科電機長だった菅谷源作氏（上等機関兵曹）は、「日吉の…丘の上には水を入れたタンクがあり、慶應も司令部も近くにあった池からタンクに水を汲み上げて使用していた。」と話しています。（慶應生協ニュース 1990年10月3日号）

また第3010設営隊の行動記録文書には、昭和19年12月1日の欄に「付帯設備新設（内部艤装、電気水道設備）」と記されています。ですので設営隊が地下壕内に水道を設備したことは確かです。（会報 2016年2月10日号 設備アレコレ【16】参照）

③換気扇の跡

3つ目は換気扇の跡です。これはバッテリー室と機械室にありました。バッテリー室、機械室には斜め上に向かって横穴があります。安藤さんに言われて初めて気がついたのですが、この横穴の回りに四角形の形に8個の痕跡があります。そのうちのいくつかには、鋸びついた小さな鉄の棒が飛び出しています。ボルトのようです。

したがってここには明らかに、何らかの機械設備が取り付けられていました。ここに何を取り付けるのかといえば換気扇以外にありません。地下壕内の換気は湿気を抜くために重要です。通信室には天井に換気通風口があったと元通信兵・下村恒夫さんが手記で書いています。（慶應生協ニュース 1994年7月15日号）

特にバッテリー室の場合は、鉛蓄電池の特質で水素ガスが発生します。これが溜ってしまうと爆発事故を起こしかねません。水素は軽いので横穴があれば抜けていきます。横穴はバッテリー室では126段の階段につながっています。

他方、機械室はバッテリー室と全く同じ大きさ・形状です。同じように細長い台座が横向きに床に並んでいるので、安藤先生は「ここもバッテリー置場だったと思う」と言つていました。機械室には手前左側に機械装置の台座があるので、私たちは機械室と呼んでいます。戦後の測量図では「machine foundation」と記されています。機械装置があったのは間違いないので機械室とよぶことに問題はありません。しかし部屋の形状からするとバッテリー置場だった可能性が高いと思います。ここにあった機械装置も電気設備だろうと思います。電力会社が供給する交流100Vの外部電源を、直流に変換する機械だったのではないかと私は推測しています。通信機もバッテリーも直流電気でないと使えません。

そしてこの部屋にも横穴があり、竪穴の通気坑（寄宿舎の手前にキノコ型の上部構造が



バッテリー室 横穴 換気扇跡

ありました) につながっています。ただ、この機械室についての聞き取りや手記・記録はありません。とはいっても機械室の横穴の回りにも、バッテリー室と同様のボルトの痕跡がありました。ですので、これも水素排気のための換気扇の取り付けボルトだったと思います。

これらの横穴は床から1mくらいの所に開口しています。私は水素の排気のためには位置が低いなあと思っていました。しかしここに換気扇が取り付けられていたとなれば、問題ありません。安藤先生のモノ(遺物・遺構)に対する考古学的調査方法は、戦時中の当事者、体験者がほとんどいなくなっている今日、とても有効で重要な方法ですね。

※ おまけの話——日吉の地下壕は今でもシェルターとして使えるか?

今、ウクライナ戦争や北朝鮮のミサイル発射を前にして、日吉の地下壕は避難シェルターとして使えるのかと聞く人がいます。どう思いますか? まず北朝鮮のミサイルについて言えば、発射から到達まで10分です。発射を探知しアラートを出すのに早くても5分と言われています。5分で地下壕に逃げ込むのは不可能ですね。

日吉の地下壕は250キロ爆弾を想定して、地下30mに築造されています。地表の出入口は特に強固につくられ、爆風を横に逃がすためにT字型に出口がつくられています。

しかし現在では、バンカーバスター(米軍の場合)などの地中貫通型爆弾が使われています。地下50m以上まで貫通するそうです。実際、ウクライナのマリウポリのアゾフスター製鉄所では、地下50mのシェルターで3ヶ月籠城して戦いましたが、このタイプの爆弾で相当な被害が出たようです。痛ましい生き埋めです。

結局、武力に対してシェルターを含めた軍備・モノで対抗しようとしてもイタチごっこで際限がありません。戦争は国家権力者がひき起こします。物理的なモノで戦争を止めることはできません。権力者の戦争を止めるには、大衆的なヒトの力しかないと私は思います。

ところで朝鮮戦争の時、米軍は日吉の地下壕を使うことを検討していたようです。『日本防空史』(浄法寺朝美著 原書房1981年刊)に「朝鮮戦争に際してアイケルバーガー大将の率いる第一騎兵師団の本部を予定していた。」と書かれています。これが本当なら米軍は、ソ連が日本を爆撃することを想定していました。米ソ全面戦争ですね。恐ろしい話です。

報告

新型コロナ下での見学会——中止から再開までの軌跡

運営委員 山田 譲

新型コロナウィルス感染症が発生して3年になります。その中で慶應大学が入構禁止になり、見学会はおろか大学内での会議や講座もやれなくなり大変なことになりました。そういう制約のある中で私たちは、私たちの活動を維持するために工夫し努力してきました。

2019年12月に中国・武漢で発生した新型コロナは2020年1月には日本に波及し、横浜港に入港したクルーズ船のクラスターで多くの死者が出てしまいました。世界中が治療法もわからないパンデミックです。私たちの会でも見学会を全面的に中止し、運営委員会、ガイド学習会、ガイド養成講座、バスツアーも中止しました。

しかし、そのような中でも運営委員会はメールで代用し、ガイド学習会は資料交換郵送方式。会報の発送はメンバー自宅でやってもらう。総会は会報の紙上方式で代替する。三浦半島バスツアーの代わりに、電車で府中・国立の戦争遺跡と古墳めぐり。このような苦肉の策で私たちの会の活動を維持してきました。とにかく運営委員、ガイドメンバー、会員相互の横のつながりを維持し確保することに力を注いできました。

見学会も新型コロナの下で何とかできないかと模索し、パワーポイントを新たに作成して小学校で出張授業もやりました。私たちは運営委員会やガイド学習会などで、対応策を何度も話し合ってきました。今日、なんとか再開できるようになったことは大きな喜びです。ここでは見学会の中止から再開への軌跡を振り返ってみたいと思います。

(1) 2020年2月25~27日 大綱中学校——最後の見学会

2月22日(土)に通常通りの定例見学会を54人の見学者で実施しました。その次に実施したのが大綱中学校で、合計8クラス289人を3日に分けてガイドしました。しかしコロナ蔓延下で、いつも通りとはいきません。それで「3密回避」のため地下壕内での集合説明(通信室と作戦室)をやめて、ワンストップ・スルー方式でやることにしました。また1クラスを2つに分けて1班の人数を少なくしました。通信室、作戦室での話は、地上でガイダンスやチャペル、寄宿舎で話す。そういう方式で無事に終えましたが、この方式が再開後の見学会の原型となりました。しかし3月1日より大学は入構禁止となり、これが最後の見学会となりました。



来往舎でのガイダンス (大綱中学) 2020.2.25

(2) 2020年10月7日 慶應高校卒業研究グループの見学会——再開第1回

新型コロナは第1波、第2波と続きオリンピックも延期になりました。しかし秋になっていったん、いくらか収まってきた。それで学術研究のための地下壕見学を大学に要請してみようとなりました。

これに先立って「感染防止ガイドライン」を7月に作成してみました。まず前提として地下壕内は必ずしも密室状態ではなく、ゆるやかに通風しています。ですから地下壕見学は不可能ではありませんが、密集、密着を避けるためにどうしたらいいかを考えました。

その要点は①壕内の説明ポイントでは、立ち止まらずに歩きながら説明するノンストップ・スルー方式にする。②作戦室、通信室、足立宅との境界柵でも、ゆっくり歩きながら説明する。いつも話していることは地上で事前事後に話す。③他方で、ふだん通過している機械室、バッテリー室、食料倉庫など、目に見えるものはできるだけ話す。④小グループに分ける。8人以下で間隔を十分あけて進む。⑤地上での全体説明の時も、1~2mの間隔をあけてもらう。⑥全員人数は30人まで。学校のクラスで40人の場合は、2分割して別々に話す。⑦ガイドの体制は点灯消灯1名、全体調整1名、各班1~2名で4名以上、体調不良対応1名、合計7名以上。⑧全員マスク必着。

これを基にしたガイドラインを大学向けに提出し、学術研究目的ということで10月7日に慶應高校の卒業研究のための見学会として、生徒7名を案内しました。これが再開第1回となりました。これを皮切りに慶應高校、慶應大学での授業や研究目的の見学会は、大学の許可が出て実施できるようになりました。

(3) 2020年11月 「見学会再開イメージ A、B、C案」作成

その上で次のステップとして、学外者を対象にした見学会を何とか再開できないものかと模索を始めました。その場合、地下壕にこだわらず地下壕抜きの一般向け見学会も含めていろいろ考えてみました。

まずA案としては、地下壕をふくむ通常コースです。この場合は先に書いた3密対策に加えて、①受付けの時に体温チェックを非接触式体温計で検温する。②アルコールで手指消毒。③参加者の氏名・住所・電話・年令を事前に確認し名簿を作成する。④見学者人数は25人までとして1班は6人以下。⑤ワンストップ・スルー方式ですが、作戦室5分、通信室5分で集合して説明する。⑥ガイダンスは来往舎が使えない陸上競技場のベンチ等。

B案としては、地下壕抜きでキャンパス内を含む地上コースです。見学者人数は25人5班まで。学内では第一校舎、チャペル。学外に出てキノコ型耐弾式堅坑上部、寄宿舎。自動車部横の階段を降りて足立宅前の地下壕出入口など。宮前公会堂から峠をこえて学内に戻り、蝮谷体育館前で終了。途中にある横穴墓や、庚申塔、祟り石なども案内する。

C案としては、キャンパス外周・地上コースです。見学者人数は15人3班まで。日吉駅で集合して箕輪町集会室など学外でガイダンス。大聖院の戦災樹木を見て、陸上競技場の横を通りチャペル下へ。キノコ型耐弾式堅坑上部・弥生式住居址、寄宿舎の手前、自動車部横の階段を降り横穴墓を見て足立宅前の地下壕出入口、宮前公会堂から峠をこえ蝮谷を通りすぎて日吉駅へ。

この3案は、A、B案とも大学の許可が難しく、またC案もそういう見学希望がなくて実施にはいたりませんでした。

(4)2022年3月 定例見学会再開

そういう中でワクチンが普及して新型コロナが比較的に軽症となり、大学も対面授業を復活してきました。それで2021年10月に「見学会再開イメージ案」を改めて作成しました。

大学側も前向きに検討し、ガイダンスの場所を藤山記念館向かいのベンチスペースに指定してきました。これを受けてトイレについては、ガイダンス前に学生食堂のトイレを使用する。見学者人数は、学生は40人までにしていますが、定例見学会では年配者がいるので30人位までとする。体温チェックは来往舎前の検温室を通過してもらう。ガイダンス前にアルコール消毒。地下壕内で全体説明をするかどうかは、感染状況をみてその都度判断する。その他、密集・密着を避ける。

そういう形で2022年3月26日(土)から定例見学会を再開しました。まず2月26日(土)にガイド練習会を行い、手順や話し方などをみんなで復習しました。3月26日の再開初回は宣伝不足で見学参加者は5人でしたが、4月以降は25~30人の参加で実施できました。

さらに2022年11月9日(水)からは月2回の実施の許可がおり、第2水曜と第4土曜に定例見学会をやれるようになりました。これにともない「現在の感染状況での見学会実施方法」を11月に作成し、通信室・作戦室での全体集合説明も従来の12分ずつに戻しました。ただ人数については30人位までに抑えています。ここは今後の検討課題です。

新型コロナは現在、第8波としては収まりつつありますが、感染力の強さが下がったわけではありません。重症化率も下がったとはいえ、新型コロナは呼吸器に危険をおよぼすこわい病気です。引き続きマスク必着、密集・密着回避で感染防止につとめながら、チームワークで安全安心な見学会をこころがけていきたいとおもいます。



定例見学会再開（暗号室・通信室） 2022.11.9

お知らせ

2023年度(第16期)日吉の戦争遺跡ガイド養成講座

第1回 4月15日(土) 13時~15時半 慶應大学来往舎・中会議室

《私たちのガイド活動》保存の会の歩み・活動 見学会の進め方 全国の戦跡保存運動
 ☆定例見学会 4月22日(土)、5月10日(水) 日吉駅集合13時

※保存の会が毎月行っている定例見学会に、実習として都合のいい日に参加。

第2回 5月20日(土) フィールドワーク 東横線日吉駅前に集合 13時~16時

《キャンパス外から見る海軍地下壕群》 日吉台の外周めぐり

☆定例見学会 5月27日(土) 6月14日(水) 13時、日吉駅前にガイド・受講者集合

第3回 6月17日(土) 13時~15時半 来往舎・大会議室

《日吉の地下壕と海軍の動き》パワポ映像での地下壕説明 連合艦隊司令部移転の背景・
 戦況 地下壕の築造方法と壕内設備の特徴・痕跡

☆定例見学会 6月24日(土) 7月12日(水) 13時、日吉駅前にガイド・受講者集合

第4回 7月15日(土) 13時~15時半 来往舎・中会議室

《まとめ》 「ガイドの手引き」説明 私たちのめざすもの——「語り継ぐ」とは?
 フリーディスカッション、修了証授与

参加費 2000円(全4回分)

申込先 ハガキ又はFAXで、①住所 ②氏名 ③年齢 ④電話番号をご記入の上、
 下記「ガイド養成講座」係へお申し込みください。問い合わせも下記へ。

横浜市港北区下田町2-1-33 喜田方 「ガイド養成講座係」

TEL&FAX 045-562-0443(午前・夜間)

主催: 日吉台地下壕保存の会



慶應湘南藤沢高校見学会

於: 来往舎シンポジウムスペース 2023.1.16



日吉台小学校体育館 2023.2.28

活動の記録(2022.12月～2023.3月)

- 12/14(水) 定例見学会 17名
 12/15(木) 会報 152号発送(来往舎小会議室)
 12/17(土) 定例見学会 15名
 1/11(水) 定例見学会 3名(同時にガイドの地下壕内部勉強会)
 1/12(木) 運営委員会(来往舎小会議室)
 1/13(金) 地下壕見学会 日吉南小学校5年生 15名
 1/16(月) 地下壕見学会 港北地域学 25名
 1/17(火) 地下壕見学会 慶應義塾高校3年N組 41名・A組 41名
 1/18(水) 地下壕見学会 慶應湘南藤沢高校3年 28名
 1/22(日) ガイド学習会(日吉地区センター)
 1/28(土) 定例見学会 30名
 2/2(木) 運営委員会(来往舎小会議室)
 2/4(土) 定例見学会 23名
 2/25(土) 慶應義塾高校旅行行事 午前30名 午後30名
 2/27(月) 田園調布学園高校 20名(4年ぶりの来訪でした)
 2/28(火)

出張授業「日吉台地下壕」
 日吉台小学校6年生
 (体育館でPowerPoint使用)
 3/1(水)
 出張授業「日吉台地下壕」
 新吉田第二小学校6年生
 (体育館でPowerPoint使用)

○地下壕見学会について
 定例見学会は毎月2回おこなっています。
 定員30名。第2水曜日・第4土曜日午後が基本です。

○受付状況

- 3/25(土) 30名受付済
 4/12(水) 24名 4/22(土) 24名
 5/10(水) 0名 5/27(土) 30名
 受付済



新吉田第二小学校体育館 2023.3.1

☆学校関係(学術・教育)の見学は定例以外ご相談で実施しています。

★お問合せ・申込みは見学会窓口まで TEL/FAX 045-562-0443 喜田 (午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758
 (見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443
 ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

| | |
|-----------------|------------------------|
| 日吉台地下壕保存の会会報 | (年会費) 一口千円以上 |
| 発行 日吉台地下壕保存の会 | 郵便振込口座番号 00250-2-74921 |
| 代表 阿久沢 武史 | (加入者名) 日吉台地下壕保存の会 |
| 日吉台地下壕保存の会運営委員会 | |